

## 滝沢克己『聖書を読む マタイ福音書講解』の研究 その六(下)

富 吉 建 周・中 島 秀 憲

### 五

更に、E・シュヴァイツァーのマタイ五章1-12節についての解釈、つまり「教師としてのイエス（五章1-2節）」と「神は貧しい人たちの味方である（五章3-12節）」についての解釈を、『マタイによる福音書——翻訳と註解——』<sup>1)</sup>によって検討する。

「教師としてのイエス（五章1-2節）」に於て、シュヴァイツァーは「マタイはルカ同様、この説話が民衆全体にかかわるものであり、「この点マタイ福音書七章28-29節により、特別に力説されている。確かに山上の説教は弟子たちの倫理である。弟子とは、イエスにより神へと招かれるすべての人々のことである。その意味で山上の説教は民衆全体に向けられ」<sup>2)</sup> たものであると解釈する。

次に「神は貧しい人たちの味方である（五章3-12節）」に関して、まずイエスの「幸福の叫び」の特色について、次いで「幸福の叫び」の歴史的構成について、そして「幸福の叫び」についての各々の解釈について、という順序で展開されている。最初の「イエスの幸福の叫び」の特徴に関して、シュヴァイツァーは「イエスの権能という出来事」つまり「その人において神がこの世界の中へと押し入って来た、その彼によって語られている」<sup>3)</sup> という点を強調する。即ち、「イエスの幸福の叫びは、もはや、幸福が請け合われるに際しての条件はつけられていない。そもそも誰に幸福が向けられているかは問題にされておらず、むしろ反対に、すべて地上での貧しい人たち、飢えている人たち、泣いている人たちの運命は一体何なのかが問題にされている。聞く耳を持つほどに十分に貧しいすべての人たちに対し、イエスにより、それも将来的成就をすでに彼らの現在のただ中へ向けて語りかける権能によって、幸福が請け合われる。それゆえにこれらの幸福の言葉は二人称形で、直接の語りかけの形で表現されている。イエスが請け合い、またそれが聞かれる場合には、人は彼の招きのもとに、新たに、かつ幸福となる。それは、イエスの招きにおいてすでに神の将来的な国が彼の上に来たからである。」<sup>4)</sup> と。

次に「幸福の叫び」（五章3-12節）が成立した歴史的な構成について、或はイエスの言葉伝承（Q資料）のマタイの教会やマタイによる編集・付加による展開を跡付けることに関して、シュヴァイツァーは、次の如く推測している。「最後に出る幸福の叫び（11-12節）は他の八つのそれとは明確に異なっている。長さの点、二人称形で語られる点、「すでに弟子たちに対する迫害を前提にしている」点で違っている。従って「11-12節」は「比較的小さい時期に成立したものであることは確実であるが、しかしそれはすでにQにある（ルカ六22-23）」<sup>5)</sup>と。その他の八つの「幸福の叫び」について、それは「四つ一組のグループ二つを形成しており、それらは言葉の数においてすら一致している。第一、二、四の言葉はルカ福音書20-23にも似ている形で存しており、つまりすでにQに伝承されていたものである。もっとも第二の言葉はマタイではイザヤ書六一章2-3節に近づけられている。すなわち、「泣いているもの」が「悲しんでいるもの」に、「笑う」は「慰められる」になっている。イザヤ書六一章1節は貧しい人たちに対する喜びの使信で始まっており、2節では悲しんでいる人たちの慰めを付け加えている。二つの幸福の叫びはつまり預言者の約束の成就と見なされており、旧約聖書の言葉遣いに近づけられているのである。これらすべてのことは、すでにマタイ以前に行われていたにちがいない」<sup>6)</sup>と。「判断するのにより困難なのは、ルカにない五つの言葉である。謙遜な人々に対する約束〔第三〕は、貧しい人々に対する約束〔第一〕の単なる異文である可能性がある。アラム語では二つの言葉はほとんど同じひびきである。後文〔5 b〕もまた内容的に相違してはいない。なぜならば、謙遜な人々がいつか相続するという地の国は、天国とちがわないからである。天国は新しい地において現実となるのである。詩篇の約束の言葉が強い影響を及ぼしている」<sup>7)</sup>と。「9節〔第七〕に対してはマルコ福音書九章50節が強く影響を及ぼしたかもしれない。10節〔第八〕は11-12節に含まれている事柄を短く表現したものである。ルカ福音書六章20-21節にある三つの幸福の叫び〔第一、第二、第四〕が最も古いという点は疑いの余地はない。少なくとも第一のものは、しかしむしろ三つ全部が、それらの矛盾した形のまま、イエスにさかのぼる。これらは彼の口から発せられたとする場合にのみ——彼の招きにおいて神自身が人に出会う、という前提〔イエスの権能〕の下にであるが——理解可能である。第二、第三の言葉では、第一の言葉にはまだない「今」は後になって始めて、おそらくルカ自身によって付け加えられたものであろう。他方、マタイでは三人称形への変更、およびイザヤ書六一章2節への接近は、その教会にさかのぼる」<sup>8)</sup>と。第四（6節）について、「義」という語の付加はマタイの関心に対応している（10、20節、六33）。また「飢えている」から「飢え、かつ渴いている」への拡大は、旧約聖書の言語に近づけたもので

ある。「貧しい」から「霊において貧しい」への拡大〔第一〕も、後からの説明である。<sup>9)</sup>つまり「厳密化によって（マタイ五3、6）解釈が施された」<sup>10)</sup>ということである。ルカにない五つの幸福の叫びについては、「当初の三つの言葉に、詩篇およびイザヤの言葉を変形して他のものが加わって大きくなった」<sup>11)</sup>とするほうが蓋然性は高い。「始めに第一の四つの言葉のグループが、5節を挿入することによって形成された。そこでたたえられている人々がギリシア語では皆πで始まっているからである。おそらくその後になって（10節のない）七つの言葉のグループが形成されたのであろう。七つのものによって構成される型が、マタイ以前の伝承に時折現れるように見えるからである。もしそうであるとするならば、福音書記者が10節〔第八〕を11-12節に依拠して結びの言葉として作ったのであろう。「迫害されている人たち」のギリシア語形は11節よりも、強度に、すでに始まっている状態を表現しており、つまりいずれにしても復活の日以後の時を指し示している。義というテーマは彼にとり重要であり、また、それは第一の言葉に出た天国の約束を再びと上げることによって全体を総括している。この最後の幸福の叫びのテーマは、マタイの時代においても一〇章15-39節が示すように、それは一層緊急性を帯びて来たのであった。<sup>12)</sup>「迫害されている人々に対しての長々と記された約束の言葉〔第九〕では、中傷だけを念頭においているマタイの方が、キリスト者に対する会堂からの追放をすでに前提としているルカよりも早い段階を描いているように思われる。<sup>13)</sup>「なお、これら二つの言葉に共通の、主要な見出し語「迫害する」は、マタイのテキスト（11節）にしかなく、ルカのテキストにはない。後から拡大された文章の用語は、比較のおそい時期の教会のそれである。」<sup>14)</sup>と。

以上を踏えて、シュヴァイツァーは5章3-12節の解釈にはいる。

3節について。まずシュヴァイツァーは全ての言葉の冒頭に「幸いなるかな（μακάριοι）」が来ている点について、「イエスの元来の請け合い（Zuspruch）は、まさに「貧しい人々」に向けられている。人間の準備行為が要求されるとの印象を与えそうなものは、極力避けられている。幸福はすべての貧しい人に対して請け合われているのであって、請け合われていると感じたり、それを謙虚にうけ入れる人に始めてそれが与えられるというのでない。彼らすべてのために神は臨在する〔「悔い改めよ、神の国は近づいた。」〕。彼は、旧約聖書における、神の意志に従って執務する裁判官のように、不幸な人々の肩を持つ。彼らは王に特に目をかけてもらっている人々である。王の憐れみは彼らのところで現される。神の王権は、力のないものの味方になる、ということなのである。この招きの持つ完全に逆説的な性格は、そのことによりますます注目に値するものとなる」<sup>15)</sup>と解している。さらに「貧しい人々」につい

て、次の如く解釈する。「マタイでは「霊に関して貧しい人たち」と訳すべきであろう。つまりさし当たっては、「心に関して清い」という平行している表現（8節）の場合と同様、人間の霊を考えるべきであろう。しかしマタイ福音書二六章41篇および詩篇五一篇14節におけると同様、人間の（従順な）霊は、神から与えられた聖霊と等置することができる。多分彼は、外的状況によって、すべてを神に期待するように追い込まれた、しかしまた本当に、すべてを神に期待すべく神から霊を与えられた、そういう人々のことを考えているのであろう。」<sup>16)</sup>と。

さらに3節b「天国は彼らのものだからである」について、シュヴァイツァーは次の如く解釈する。「貧しい一人の人物が、何ら貧しい人々の状態をかえることをしないで、彼らは幸福であると言う、ただそれだけの理由で貧しい人々が幸福であるということは、決して分り易いことではない。イエスに出来る唯一の根拠づけは、彼らのものである神の国を指し示すことである。それに続く根拠づけの言葉は、すべて未来形で書かれている。そして、イエスが御国について語る場合は、それはいつも若干将来的でもあるのである。彼はおそらく、万事は、イエスがここで請け合うことを神がいつか果して下さるといふ点にかかっている、ということを知っている。しかし、彼がそのことを行うとき、将来的な御国は彼らのところに来る。それゆえに彼らはすでに「幸福」なのである。もっとも、そうであるならば、すべては、イエスの背後に神自身の権能が存するといふ点にかかっている。」<sup>17)</sup>つまり、「貧しい人々に向けられたイエスの招きの有効性が、その人において神がこの世界の中へ押し入って来た、その彼によって語られているといふ点にかかっている」<sup>18)</sup>といふことである。それ故に、マタイは「貧しい人々」というイエスの言葉を「霊において貧しい人々」と変えたのである。なぜならば「マタイは、この言葉は、それがイエスによって神の権能をもってわれわれに請け合われるとき、つまり、旧約聖書において「霊」の出来事と記されているあの秘密の幾分かが生起するときに真実となるという点を、いくらか確保し」<sup>19)</sup>ようとしたからである。「ただ、たえず繰り返し行なわれるイエス自身による請け合いにおいてのみ、それは真実となるのである。マタイは一般化することも、過去の言葉とすることも望まなかったので、「霊において」という語を付け加えることによって、この言葉がその時代において言うべきことを解説することを試みた」<sup>20)</sup>のだと。

4節について、シュヴァイツァーは次の如く解釈する。まず「悲しんでいる人々」について、「イザヤ六一章2節におけると同様、ここではあらゆる悲しみが考えられている。それが肉体に由来するものか、心に由来するものかは問題ではない。つまりここでも、神はもっとも必要とされる場所に臨在する、ということが言われている

のである。これもまた、一般にあてはまる法則ではない。イエスの臨在するところにおいてのみ、悲しみが克服された、という事態がおこり得る（マタイ九・15）<sup>21)</sup>のである。そして4節bについて、「マタイ福音書五章4節は、イザヤ書一二章1節、四九章13節、五一章3、12節、五二章9節と同様、慰めを神自身から期待している。この言葉は、うけ入れられることを欲し、耳傾けることを求める呼びかけ、語りかけなのである。この言葉は、イエスによって自分に、神はまさに今や、預言者たちが神の終末時に対して期待していたとおり、現実となる、と語りかけさせる人において、真実となる。」<sup>22)</sup>と、シュヴァイツァーは解釈する。

5節について、シュヴァイツァーは、まず「謙遜な人たち」——第一の言葉（五3）を言いかえた言葉——について次の様に解釈する。「イエスの用語法では、この語は「貧しい」という語とほとんど区別できない。つまりそれは「取るに足らない、卑しい」というひびきを持っており、おそらく「権力のない」と訳すのが最もよい。弱々しさとは、それは全く関係がない。この権力のないものたちが、いつか地の国を所有するはずなのである。この語はマタイ（一一29「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負いわたしに学びなさい。」イエスについて二一5「柔和な方＝王」）とペテロの第一の手紙三章4節においてのみ、このような意味で出る。マタイはつまりイエス自身をこのような「謙遜」のそもそもの模範と見ているのである。しかしそうであるならば、最初の二つの言葉でたたえられている貧しい人たちおよび悲しんでいる人たちも、周囲の人々に向って、そのあらゆる希望を神にかけている人々として、つまり、他の人々を軽蔑することなく、彼らに仕える用意のある、権力のない人々として登場することが許される、ということになる。この言葉は教会に対し、イエスの約束によって実現されたままの姿で生きるよう勧告している。」<sup>23)</sup>と解する。また5節bの約束（「彼らは地の国を相続するからである。」）について、「地（あるいは国）を所有するとの約束は、旧約聖書では当初はカナンのに、次いで、やがては神の国の所在地となる全地に関係づけられている。詩篇一一五篇16節ではその線に沿って、天は神の住居であり、地は人々に与えられている、と述べられている。この点から、イスラエルの将来期待が展開した。すなわち、一方では、神自身が支配し、他のあらゆる民族がそこでイスラエルに仕え、あるいはイスラエルの中にうけ入れられる、地上の王国が期待される。他方では人々は、すでにエノクとエリヤにおいて起こったように、天にあげられ、うけ入れられる、という形を考えている。これら二つの見方は決して互に非常にかげ離れたものではなく、それゆえ両者は、ここの3節および5節におけるように並んで出ることもある。」<sup>24)</sup>と解している。

6節について、シュヴァイツァーは、次の如く解釈する。「イエスは、ルカにおけ

るように、敬虔な人々、あるいは社会的に飢えている人々のすでに出来上がっている群れをたたえることはしていない。この言葉は救いの言葉である。それは人々を聞くことへと招待することによって、その妥当する人々を創り、それを聞く人を神の救いの中に移す。五章20節によるならば、マタイは何よりも、神の義がその教会の行動の中においても現実となる、という点に関心を持っている、とすることができる。他方彼には、飢えること（および渇くこと）について語っている言葉があらかじめ与えられていて、それに彼が「義」という見出し語を付け加えたのであった。旧約的背景の下では、そのことによってまず、来るべき御国と、その中で現実化された神の義とが考えられていた。それは、暴力の下で苦しんでいる人たちのためにさばきを行う方を求めての叫びであり、それは10節の、神の王たること（＝「御国」と結びついている）、「義の住む……新しい天と新しい地」を求めての叫びである。たといマタイにおいて重点が弟子たちによるこの義の実現に置かれてはいても、旧約聖書の影響を受けているユダヤ人はその際誰一人として、本来の成就是神の終局史的行為であるはずだということを忘れることができなかつた。この成就是満腹することと表現されている。」<sup>25)</sup>と。

7節について。「憐れみはマタイにとってはイエスの宣教の中心であり、それは、律法の成就が何を意味するかを示している。つまり、憐れみとは喜捨に際しての気前良さに限られるものではない。ルカ福音書六章36節 [「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」] では、人間の行うあらゆる憐れみの行動は神の憐れみに起源を持つ、という点が確保されている。このことは悪い僕についてのイエスのたとえ（マタイ一八23-34）にまさにあてはまる。」<sup>26)</sup>とシュヴァイツァーは解釈する。また6節bについては、「マタイにとって重要なのは、憐れみを自分で行わない者は、神の憐れみをあてにするわけにはいかないという発言である（一八35）。これは主の祈りに対する彼の注解である。このようにして第五の幸いの言葉は、人間の憐れみは神の審判に対して勝利する（ヤコ二13）とか、人々を憐れむ人が天から憐れみをうける（ラビの言葉）という発言に近づくこととなる。憐れみのない世界のただ中で、憐れみとは、イエスの弟子たちがそれを飢え渇いて求めている、あの義である。」<sup>27)</sup>と解する。

8節について、シュヴァイツァーは、その「清い心」を、「マタイは憐れみを純粹に外的な祭祀の行為に対立するものと理解している。もっとも、主の山に上り、聖なる場所に立つことを欲する人々に対する許可条件をあげている詩篇二四篇3-5節において見られるように、通常清い手と清い心とは並べてあげられる。その際清い心とは、悪をもくろまず、その隣人を欺かない、とも描写される。心はそれゆえ、感情の

座であるだけでなく、それはもっともかくれたものであって、そこから生全体が、しばしば無意識の中に形成される。マタイが考えているのは、それゆえ、「無邪気な」（六22、ローマ二8）、神に向けられた心である。それは彼において信仰と称される、まさにそのものであり、パウロなら明白さ、濁りのなさとも表現することのできる（Ⅱコリ一12、ピリ一10、二15）、まさにそのものである。<sup>28)</sup>と解し、「彼らは神を見るからである」については、「今人間にとって不可能である神を見ることは、終りの時に成就する約束である。この終りの時には、神と人間との妨げられることのない交わりが実現するのである。神をそのあるがままに見るということは、信仰の希望している事柄の最終的な、それをしのぐもののない成就である。その中には、救い、生命、栄光と呼ばれるすべてのものが含まれている。」<sup>29)</sup>と解釈する。

9節について、シュヴァイツァーは、「[平和をつくる人たち]という語は、聖書の中でここにしかない。それは平和を好むというだけでなく、「平和を創り出す」（ラビ的表現）人々を指している。このような生き方への呼びかけはイエスの時代のユダヤ教では、ほとんどいつも、新約聖書で愛の誠命が出る、そのような箇所に出る。平和を所持しているものは、救いにあずかっているのである。平和の君とはメシアの名前である（イザ九5）。」<sup>30)</sup>と解する。また9節b（「彼らは神の子らと呼ばれるからである。」）について、シュヴァイツァーは、イエスが「わたしの父」と「君たちの父」とを区別すると同様に「イエスが神の子である」と「人々が神の子である」とを区別しているということを拠り所にして、次の如く解する。「平和をつくる人たちには神の子たることが約束される。イエスは「父」について、「わたしの父」と「君たちの父」とを区別している点は新しい。イエスは、すべての人々と共通の「わたしたちの父」という形で、自分を彼らと一緒にすることは、決して行っていない。マタイ福音書六章9節「主の祈り」の「わたしたちの父」もイエスが祈ることを教えた弟子たちに限定されている。ルカ、とくにマタイは両表現とも知っており、しかもそれらを混同することはない。いずれにしてもイエスは神を第一には自分の父として呼びかけた（マル一四36）。彼が自分に従って神を自分たちの父と呼びかけるようにと弟子たちに教えたということは、奇跡であり、賜物である。以上の事実に対応して、人々を神の息子たち、子らとすることも極めて控え目にしか行われぬ。パウロおよびヨハネ以外では、神の子たることは、人間に対して最後の審判で永遠の生命として与えられる賜物であるという点が、一貫して確保されている。神の子について扱っている詩篇二篇は、現在すでにキリストにおいては真実となっているが、信仰者には来るべき時においてそれは真実となる。最初の三つの福音書もこれと同じように神の子たることについて語っている。ただ、愛敵の言葉——これも元来は多分同じ意味に理解されてい

たのであろう（ルカ六35）——においてだけは、マタイ福音書五章45節「あなたがたの天の父の子となるためである」はおそらく、この奇跡は、一人の人間が完全に従順へと成長し、その行動において神に似るようになるところですでに実現している、と考えたのであろう。マタイは父という名称に好んで「天の」を付け加える。これは、このようにしてこの呼びかけが奇跡であることを思いおこさせるためである。イエスが子であることが人間の場合とはちがうという点は、マタイではすでに一章18-25節で、次いで一四章33節、一六章16節でも強調されている。これと同じ理由から、ヨハネは神の「子ら」（一12）を唯一人の「子」と区別し、またパウロは、われわれはただ彼を信じ、彼の霊にあずかるものとして、子供たちとなる、という点を明らかにしている。それと同じようにマタイ福音書五章9節でも明白に神との交わりの奇蹟が考えられているのであって、この奇跡は平和をつくる人に最後の審判において、彼を変化させる神の力にみちた宣言によって（「呼ばれる」）、賜物として与えられるはずである。」<sup>31)</sup>と解釈する。

10節について、シュヴァイツァーは、次の如く解釈する。「迫害をうけている人たちが神に愛されている人たちであるということは、イエスの時代のユダヤ教では広範囲にわたって強調されている。義人の受難について述べている詩篇が、そのことを知っている。「義のゆえの」苦難について語っているペテロ第一の手紙三章14節、「さいわい」「そしる」「喜ぶ」「歓喜する」という見出し語の出る同四章13-14節は、マタイ福音書五章10節あるいは同11-12節のような言葉が種々の形で知られていたことを示している。6節の場合とはちがって、ここでは義は冠詞なしに使われている。それはおそらく、「あの義」が具体的となる種々の発現の事例が考えられているためであろう。」<sup>32)</sup>と、また約束の言葉については、「3節では神の国の約束がこの一連の発言全体を開始したが、ここではそれがそれを閉じている。このようにして八つの幸いの叫びすべてを、神を頼りにし、神を待ち望んでいる人たちに対する神の然りが貫いている。この神の然りは——見える形での約束の履行は神のみの権限に属しており、その御国の到来において始めて真実となるとはいえ——イエスの力にみちた語りかけにおいてすでに現実となるのである。」<sup>33)</sup>と解釈される。

11-12節について、シュヴァイツァーは次の如く注解する。「この最後の、他にくらべてはるかに詳細な請け合いの言葉は、よりおそい時期に行なわれた現実在即しての発言であって、それによって教会は、イエスの語りかけがどこにおいて（教会の苦境において）現実となるかを書きとめている。マタイにおいては、イエスの弟子たちが何よりも中傷によって攻撃されている状況がまだ反映している。中傷はユダヤ人にとって非常に強い打撃である。中傷されたものは共同体の中でのその地位を、そして



そのことによって、当時の状況では、ほとんど生存の可能性をも失うこととなる。ここでもたたえられているのは、中傷されている人たち、栄光とは無縁に敗北を喫している人たちである。』<sup>34)</sup> と、さらに12節aについて「「幸いな」という語がすでに述べていることは、さらに詳しく、「喜び、歓呼をあげる」と言い直され、そのことにより純粋に宗教的な領域から取り去られている。いかにイエスの語りかけを聞くことが現実に全生活を独占しようとするかが、明らかとなる。ここにおいても、宗教的なもののためにとっておかれた心のある種の深みだけが問題になっているのではなく、心の全体が問題となっているのである。それはイエスの言葉をもとにして生きるべきであり、そのあらゆる現れは、そこから何か輝しいものを得るべきである。このことは、人間の生がイエスの言葉により神の将来に向けてその照準を合せられるという事実において基礎づけられている。』<sup>35)</sup> と、また12節bについて「ここでは預言者たちの運命との比較が行なわれているが、13—16節があてはまるすべてのイエスの弟子は神の預言者であるということが述べられているのである。彼らの運命は預言者たちの味わう苛酷な宿命である。報賞が「天において」用意されていることは、神がそれを全く確実な仕方ですべてのイエスの弟子に、ということである。』<sup>36)</sup> と、シュヴァイツァーは解する。

最後に、シュヴァイツァーは、イエスの幸いの言葉の特徴を次の如く総括する。即ち「(神の子・キリストである) イエスの語りかけという出来事に」その全てがかかっていると。しかしその際イエスが語りかける人々について、「イエスの招きは、あらゆる貧しい人、飢えている人、泣いている人に向けられており、その際、何らかの付け加えの言葉や、ましてや人間によってみたされなければならない条件が設けられることはない」<sup>37)</sup> ものであったが、この開放性は時代的・社会的状況に合わせて、イエス以後、マタイやルカの如くイエスの語りかけにおいて「神の呼びかけ」を聞くという点に関して「種々の仕方ですべてにさされなければならなかった」と理解して、次の様に、まとめる。「(「その人において神がこの世界の中へ押し入って来た、その」)<sup>38)</sup> イエスの請け合っている救いは、単に将来的なもの(「終末時期待」)ではなく、それは同時に現在の救いである(「イエスにより、それも将来的成就をすでに彼らの現在のただ中へ向けて語りかける権能によって、幸福が請け合われる。』<sup>39)</sup> 或は「これらの幸福の叫びは、イエスにおいて到来した特別の終りの時を述べている。』<sup>40)</sup> もっとも、これらのことを語るものが、神からその地位を奪うというのではない。神自身の行為が、御国、慰め、嗣業、飽満をもたらすのである。しかし、イエスは神の全能において、やがて来ることを、すでに今日、彼に耳傾け、その言葉を活動させることのできる人々に向けて語る。元来のイエスの言葉では、とくに宗教的な態度、つまりたとえ敬虔な従順がたたえられてはいないし、ある特定の社会層が全体としてたたえられてもい

ない。すべては人々によって聞かれるイエスの語りかけという出来事にかかっている。単に神を求める人々ではなく、神を必要とし、またそれを聞くことを許されている人たちが、イエスの語りかけの下で幸福となるのである。メシアの到来の期待は、全く予期しなかった仕方を実現する。イエスは待ち望んでいる人たちを簡単にすでに所有している人たちにすることはしない。たたえられているのは、神を神であり続けさせ、それゆえに約束の現実の履行を来るべき彼の行動に期待するところの、神を待つということである。イエスはしかし非常に強固にこの来るべき神を期待しているので、それゆえに彼は人々を聞くことへと呼びかけ、その結果彼らが今すでにこの来るべき神について彼が持っている確かさの中へと取り入れられ、それによって幸いとなるように仕向ける。ただし、そのことの中に神の呼びかけを聞きとることのできないものは、それを単に一人の熱狂者の幻想としか見ることができない。イエスによって呼びかけられたものたちが内的に貧しいのか、外的に貧しいのか、意識的にそうになっているのか、無意識にか、なるべくしてそうであるのか、そうでないのにそうになっているのか、このような点は、彼は大幅の自由をもって、決着をつけないままにしている。この点は後になって、種々の仕方でも精確にされなければならなかった。すでにQに採用される段階で、聞くことによって実現される回心の意義が強調されている。ルカはその反対に、彼の「今や」によって、現実に貧しい人たち、飢えている人たち、泣いている人たちが語りかけられているのだ、ということ強調している。マタイは最初の三つの言葉に施した付加と、それに続く五つの言葉とによって、ほかよりも強度に、人間の内的態度とそこから出て来る行動とを力説した。彼はそのことによって、イエスの言葉は聞かれること、人間の中に入りその全存在に影響を及ぼすことを欲しているという点をしっかり押さえた。彼は外的にはほかよりも強度にこれらの言葉を変更したが、しかし彼はおそらくルカよりも固定されてはおらず、まだ完全に開放的なイエスの宣教に、より近いところにいる。」<sup>41)</sup>と、シュヴァイツァーはまとめる。

——以上我々はE・シュヴァイツァーの「教師としてのイエス（五1-2）」「神は貧しい人たちの味方である（五3-12）」についての解釈を詳しく聞いたので、我々はこれからその批評を行う。最後の点つまりイエスの幸いの言葉は「(神の子・キリストである)イエスの語りかけ」に全くかかっている。マタイやルカがイエスの言葉を変更したのは、彼らの時代状況において「イエスの語りかけにおいて「神の呼びかけ」を聞くための精確化である」ということであるが、シュヴァイツァーは、「これらのことを語るもの〔神の子・キリストであるイエス〕が、神からその地位を奪うというのではない。」「もっとも、そうであるならば、すべては、イエスの背後に神自身の

権能が存する、という点にかかっている<sup>42)</sup>と、「父なる神」と「神の子・キリスト」とを区別している。しかし「神の子・キリスト」の、「イエス」の「背後に神自身の権能が存する」という場合の「背後に」ということはどういうことか。神の子・キリストであるイエスのどこからその「神の権能」は出てくるのか。同じことは、シュヴァイツァーが「その人において神がこの世界の中へと押し入って来た、その彼によって語られている<sup>43)</sup>」と言う場合、人イエスの中に神の働きである「聖霊」（神の呼びかけ）が働いているということであろうが、その「聖霊」はどこから出て来るのであるか。また「幸福の呼びはイエスにおいて到来した特別の終りの時を述べている<sup>44)</sup>」というのであるが、神の子であるイエスのどこに「特別の終りの時は到来したのか。そもそもシュヴァイツァーは「イエスは神の子・キリストである、唯一の神の子（子なる神・キリスト）である」と主張するのであるが、何を根拠にしてそう言おうとするのか。伝統的なキリスト論ののっかって主張しているにすぎないのではないか。なぜなら「人イエス」と「子の神・イエス」を厳密に区別していないのであるから。（「人イエス」は十字架に架けられて殺されたのであるから、「子の神・キリスト」ではないことは明らかであるし、イエスは「自分を捨て、自分を十字架につけて、わたしに従って来なさい」（マタイ一六24）と言われているのであるから、「人イエス」と「子の神・キリスト」とは区別せざるをえないのではないか。また「子の神・キリスト」という人間の絶対的限界に根拠づけられることなしには、人イエスはまことの人であるということが出来ないのである。）——このような肝腎要のキリスト論がシュヴァイツァーにおいて曖昧である。従って、「父なる神」の「呼びかけ」が、実は「子の神・キリスト」——「インマヌエルの原事実」に於ける「子の神・キリスト」——から由来しているのであるが、シュヴァイツァーは「人イエス」と「子の神・キリスト」を厳密に区別しないので「子の神・キリスト」を通して出て来るのだと言うことができないので、ただただ「イエスの語りかけという出来事」に重心をおくほかなくなっているのである。「人イエス」と「父なる神」とは「子の神・キリスト」において直接に一つである、不可逆的に<sup>いつ</sup>一である。つまり「インマヌエルの原事実」において、「人イエス」は実在し、それによって支えられ生かされている、「人イエス」の中に働く「聖霊」や人イエスの宣教を通しての「神の呼びかけ」或は人イエスがどこまでもそれに従順であった「神の御心」は、「インマヌエルの原事実」における「子の神・キリスト」を通して「人イエス」の言葉と行動において現れているのである。また「イエスにおいて到来した特別の終りの時」とシュヴァイツァーは言うのであるが厳密に即事的な表現ではない。「人イエス」と「子の神・キリスト」とを厳密に不可逆的に区別して、「インマヌエルの原事実」における「子の神・キリスト」において特別の終り

の時は到来しており、そこから新しい時の始めも始まるのである。換言すれば人イエスの根底に「子の神・キリスト」は生きて働いておられ、そこに「父なる神」の天地創造・保存は生起しているのであり、そこに神の創造の形式として時間・空間はあるのである、時の終り・時の始めがあるのである。従ってシュヴァイツァーは「すべては人々によって聞かれるイエスの語りかけという出来事にかかっている」<sup>45)</sup> というのであるが、これは独断的・伝統的キリスト論に基づくものであり、積極的には、マタイの福音書は、その中の「幸いの言葉」或は山上の説教は、全からく「インマヌエルの原事実」にかかっている。「人イエス」は、誰よりも完全に「インマヌエルの原事実」を指し示された、その宣教つまり言葉と行為を通して。従って、「子の神・キリスト」の完全な映しとして人イエスは、「神の子・キリスト」であるといっているのである。

次にイエスの呼びかけの対象である人々に対するイエスの開放性、つまりイエスの招きはあらゆる貧しい人、飢えている人、泣いている人に向けられているという開放性は、「インマヌエルの原事実」が誰にでも、すべての人に無条件に、第一義的に、不可逆的に、与えられている、恵まれているという事実に基づいているのである。従って「幸福の言葉」における「貧しい人々」「悲しんでいる人々」「謙遜な人々」「義に飢え渴いている人々」「憐れみある人々」「清い心の人々」「平和をつくる人々」「義のために迫害されている人々」とは、単に神を必要としている人々であるとか、イエスの語りかけを聞くことを許されている人々とか、現実的社会的にそのような状況においてある人々を意味しているのではなくて、どこまでも「インマヌエルの原事実」を信頼して生きる人の生き方・在り方を分節的に、限定的に述べたもの、「インマヌエルの原事実」にのみ信頼して生きられたイエスの生き方を模範とする、「インマヌエルの原事実」に信頼して生きる人々の生き方・在り方を展開したものであるのである。従って、イエスの場合どこまでも「インマヌエルの原事実」に重心・第一義があるのであるが、この重心がずれて、シュヴァイツァーの解釈するような「すべては人々によって開かれるイエスの語りかけという出来事にかかっている」<sup>46)</sup> ということになると、イエスの場合の無条件の開放性（「インマヌエルの原事実」の普遍性・開放性）が、いつのまにか「単に神を求める人々ではなく、神を必要としましたそれを聞くことを許されている人たちが、イエスの語りかけの下で幸福となるのである」<sup>47)</sup> と言うように「それを聞くことを許されている人たち」「イエスの語りかけを通して、神の呼びかけを聞きとることのできる人たち」というように条件付き・制限されたものにならざるをえないのである。シュヴァイツァーは、時代情況にあわせての「種々の仕方での精確にされなければならなかった」と言っているが、イエスの如くに「インマヌエルの原事実」に重心をおいているか、単に「神の子イエスの語りかけ」に重

心をおいているかの相違の現われである。人イエスによらない、「天地創造の時」から、つまり太初から、無条件に・端的に・不可逆的に、全ての人に「父なる神」から贈られている、奇跡的な「インマヌエルの原事実」に於てある人々は、「回心」や「今や」による「現実的に貧しい人たち、泣いている人たち、飢えている人たち」や「霊において」や「義」を付加することによる「人間の内的態度とそこから出てくる行動」には限らない人々であり、人イエスの如くに「インマヌエルの原事実」のみを信頼して生きる人々である。従って、シュヴァイツァーが独断的・伝統的キリスト論に災いされて「イエスは非常に強固にこの来るべき神を期待しているので、それゆえに彼は人々を聞くことへと呼びかけ、その結果彼らが今すでにこの来るべき神について彼が持っている確かさの中へと取り入れられ、それによって幸いとなるように仕向ける。」<sup>48)</sup>とか「メシアの到来の期待は全く予期しなかった仕方を実現する。イエスを待ち望んでいる人たちを簡単にすでに所有している人たちにすることはしない。たたえられているのは、神を神であり続けさせ、それゆえに、約束の現実の履行を来たるべき彼の行動に期待するところの、神を待つことである。」<sup>49)</sup>とか本末を転倒したシュヴァイツァーの解釈も「人イエス」に抛らない「インマヌエルの原事実」が太初から全ての人々へ贈られているということを踏まえて、はじめて理解されることである。換言すれば「神の子・キリストであるイエス」と「父なる神」を区別するだけでなく、その独断的な「神の子・キリストであるイエス」を、「インマヌエルの原事実」に即して「人イエス」と「子なる神・キリスト」（唯一の神の子）とを厳密に区別しなければ、シュヴァイツァーの曖昧な表現は明確なものとはならない。「人イエス」のところにも、「インマヌエルの原事実」は、一方的・無条件的・端的に太初から来ているのである。「人イエス」も人である限り、人間の絶対的限界である「子の神・キリスト」に信頼して、それによって支えられ生かされることによって、実在するのである。従って、「イエスは非常に強固にこの来たるべき神を期待しているので」とシュヴァイツァーは言うのであるが、まったく逆でイエスは「インマヌエルの原事実」という何よりも強固で根源的に確実な、イエスに依らないこの原事を信頼されて自然に生きられたのである。また「神を待つ」までもなく、イエスの根底に「インマヌエルの神」はすでに来ておられるのである。

次にシュヴァイツァーの「迫害を受けている人々」についての解釈を問題にする。「迫害をうけている人たちが神に愛されている人たちであるということは、イエスの時代のユダヤ教では広範囲にわたって強調されている。義人の受難について述べている詩篇がそのことを知っている。」<sup>50)</sup>とシュヴァイツァーは自明のこのように言うが、「義のゆえの迫害」というその「義」がどこにあるのか、どうして迫害がおこる

のか、さらに「神に愛されている人たち」ということがどういう事柄を意味しているかは全然説明してはいないのである。「義」「神の義」はどこにあるかといえば、「インマヌエルの原事実」における神と人との直接的な関係点（子の神・キリスト）においてあるのであり、従って「義人」とは、「インマヌエルの原事実」を信頼し、そこにある「神の義」を、自からの思考と行動において映し出している人のことである。何故に迫害が必然的であるかと言えば、イエスの如く、「インマヌエルの原事実」に信頼して生きる人は、そうではなくて「インマヌエルの原事実」に基づいて成り立って来たもの、例えばモーセの十戒や神殿や宗教や国家や富などに自からの生の根拠をおいている人達（ローマの権力者、ユダヤ教の支配者、大地主等）から見ると、イエスの如き「インマヌエルの原事実」（様々なよきものの源泉）に信頼している人々は、まったく自分達の立場・生の根拠をおびやかすもの、否定する者と見えざるをえないので、自分達の絶対化された立場を守るためには、維持して行くためには、イエスの如き人達を迫害し、抹殺しなければ気が安まらないのである。この様な意味で、「インマヌエルの原事実」（神の義）に生きる人々には必然的に迫害が起こらざるをえないのだ、現実において。また「神に愛されている人たち」とは、イエスの生き方を考えるとわかる。即ち、イエスは、ヨハネから、「すべての義をみたまはわれわれにふさわしいことなのだ。」<sup>51)</sup>（マタイ三15）として、洗礼を受けられると、天から声があって「この者は、わたしの意になつた、わたしの愛する子だ」（マタイ三17）と称えられた。つまり「インマヌエルの原事実」（神の義）に信頼して生きるイエスにとって、ヨハネの洗礼は、「神の義」の現われとして受けとめられ、それを自からの思想と行動において映し出された。するとイエスの踏えている「インマヌエルの原事実」（天）から「愛する子」という声が響いてきた、換言すれば、「父なる神」の「愛する子」という声が「子なる神・キリスト」を通してイエスに響いてきた。イエスは「わたしの意になつた、わたしの愛する子」と称えられたのだ。さらに「天国は彼らのものだからである」について、シュヴァイツァーは「八つの幸いの叫びすべてを、神を頼りにし、神を待ち望んでいる人たちに対する神の然りが貫いている。この神の然りは——見える形での約束の履行は神のみの権限に属しており、その御国の到来において始めて真実となるとはいへ——イエスの力にみちた語りかけにおいてすでに現実となるのである。」<sup>52)</sup>と解釈しているが、ここでもシュヴァイツァーが、イエスの宣教の肝腎要のこと、「インマヌエルの原事実」（「神の国は近づいた」）を見ていないことを示している。「神を頼りにし、神を待ち望んでいる」その神は、漠然とどこかに実在するのではなくて、「インマヌエルの原事実」に自からを限定して来ておられる「父なる神」であり、その原事実を離れては・その「子の神・キリスト」を通さずに

は我々は「父なる神」を知ることができないのである。従って「神の然り」（天国は彼らのものだからである）も、迫害を受けている人が踏えている、信頼している「インマヌエルの原事実」（御国）から出てくるのであり、「見える形での約束の履行は神のみの権限に属しており、その御国の到来において始めて真実となる。」ということも、我々にとって端的に・無条件的に・不可逆的に与えられている「インマヌエルの原事実」の成立・成就是、ただただ「父なる神」の権限・恵み・決定によるということを行っているのである。従ってまた「イエスの力にみちた語りかけにおいてすでに現実となる。」ということも、「インマヌエルの原事実」に自からの生死の根拠をおいているイエスにとって、「イエスの力」は全能なる創造者なる「父なる神」の力を映し出しているものであり、「イエスの語りかけ」に依らず、そのイエスが信頼している「インマヌエルの原事実」から「神の然り」は出てくるのであり、イエスの如くに「インマヌエルの原事実」のみを自からの生死の根拠にしている人にとって、真実のこととして「天国は彼らのものだからである」と自然に言うことができるのである。

最後に「喜び、歓呼をあげよ」（五12）についてのシュヴァイツァーの解釈を問題とする。即ち「「幸いな」という語がすでに述べていることは、さらに詳しく「喜び、歓喜をあげる」と言い直され、そのことにより純粋に宗教的な領域から取り去られている。いかにイエスの語りかけを聞くことが現実に全生活を独占しようとするかが、明らかとなる。ここにおいても、宗教的なもののためにとっておかれた心のある種の深みだけが問題となっているのではなく、心の全体が問題になっているのである。このことは、人間の生がイエスの言葉により神の将来に向けてその照準を合わせられる、という事実において基礎づけられている。」<sup>53)</sup>と。——ここでも「インマヌエルの原事実」（「神の国は近づいた」）と言うイエスの宣教の核心が欠落している故に、「イエスの語りかけ」——イエスの権能——に重心がかけられすぎているのである。迫害であるからまさに現実生活にかかわるのであり、単に宗教的な心の深みだけが問題になっているのではなく心の全体が問題になっているのだ、と言うのであるが、イエスの如くに「インマヌエルの原事実」に自分の生死の拠り所を置いている人にとって、「インマヌエルの原事実」に信頼するとは自己そのものが、自分の全体（心身）がそれに懸けられているということであり、「インマヌエルの原事実」（神の義）に全重心を懸けて生きているのであるから、そうでなくそこから派生してきた成果（宗教、神殿、国家、富、土地 etc）に生の根拠をおいている人達（宗教的権威、国家の権力者）から見れば、自分達の立場をおびやかし、否定するものと映らざるをえない、それ故に自分達の立場を維持するために、それら派生的なものの源泉を依り拠とする人達を、迫害・抹殺しなければ安んずることができないのである。従って、「人間の生がイエ

スの言葉により神の将来に向けてその照準を合わせられる、という事実において基礎づけられている。」とシュヴァイツァーは言うのであるが、真に積極的に、厳密に即事的に「インマヌエルの原事実」に、イエスの言葉に依らずに、人間の生は太初から基礎づけられている、この原事実を離れては人間の生活・現実はありえないのである。

次に9節の「平和をつくる人たちには神の子たることが約束される」についてのシュヴァイツァーの解釈を問題とする。彼は、この「神の子」と「唯一の神の子」(イエス)とが区別されなければならないということを論証するために、イエスが「わたしの父」或は「君たちの父」と言う場合に、イエスが両者をはっきり区別しているということを手懸する。「イエスは、すべての人々と共通の「わたしたちの父」という形で、自分を彼らと一緒にすることは、決して行っていない。」<sup>54)</sup>「主の祈り」の「わたしたちの父」もイエス自身は含まれていない。「イエスは神を第一には自分の父として呼びかけた(マル一四36)。彼が自分に従って神を自分たちの父と呼びかけるようにと弟子たちを教えたということは、奇跡であり、賜物である。以上の事実に対応して、人々を神の子らとすることも、極めて控えめにしか行われぬ。パウロおよびヨハネ以外では、神の子たることは人間に対して最後の審判で永遠の生命として与えられる賜物であるという点が一貫して確保されている。最初の三つの福音書も同様である。ただ愛敵の言葉「あなたがたの天の父の子となるためである」——これも元来は多分同じ意味に理解されていたのだろう(ルカ六35)——においてだけは、この奇跡は、一人の人間が完全に従順へと成長し、その行動において神に似るようになるところにすでに実現している、と考えたのであろう。イエスが子であることが人間の場合とちがうという点は、マタイではすでに一章18—25節で、次いで一四章33節、一六章16節でも強調されている。これと同じ理由からヨハネは神の「子ら」(一12)を唯一人の「子」と区別し、またパウロは、われわれはただ彼を信じ、彼の霊にあずかるものとして、子供たちとなる、という点を明らかにしている。それと同じようにマタイ福音書五章9節でも明白に神との交わりの奇跡が考えられているのであって、この奇跡は平和をつくる人に最後の審判において、彼を変化させる神の力にみちた宣言によって、賜物として与えられるはずである。」<sup>55)</sup>と、長々と引用してきたが、シュヴァイツァーの解釈がキリスト論の伝統——「人イエス」を三位一体の神の「子の神・キリスト」に誣いるというそれ——に囚われたものであるかが明らかである。シュヴァイツァーは、「イエスの語りかけ」「イエスの権能」を言わんがために「神の子・キリスト」(イエス)と我々のなる「神の子」(奇跡、賜物であるそれ)との区別に固執している。彼が「インマヌエルの原事実」(「神の国は近づいた」)がイエスの宣教の要であることを見ることができていないからである。どんな人も(イエスという人も含



めて) 端的に、無条件に、不可逆的に「インマヌエルの原事実」に於て実在しており、イエスは、その原事実「聖霊」によって覚醒し、その「インマヌエルの原事実」に信頼して生死したのである、そしてイエスは、全ての人のところにすでに与えられている「インマヌエルの原事実」(「天の国は近づいた」)を宣教によって指し示され、イエス自身の如く、その「インマヌエルの原事実」を信じて生死するように教えられたのである。従って「インマヌエルの原事実」に於て人は実在するので、イエスを含めて誰れでもそこに臨在しておられる「父なる神」と直接に一つであるので「神の子」であるのだ。この限り、「わたしの父」、「君たちの父」、「わたしたちの父」において区別はないのである、「インマヌエルの原事実」に自己を限定して来ておられる「父なる神」のことであり、イエスも含めて我々は「インマヌエルの原事実」に於ける、神と人との結接点(子の神・キリスト)において「父なる神」と直接に・不可逆的に一つであるので、そこに親しく臨在されている「父なる神」の「子」・「神の子」であるのだ。ただ我々は生まれながらに「インマヌエルの原事実」に盲んでいるのに対して、イエスは生まれながらに「聖霊」によって「インマヌエルの原事実」に信頼して生死された、という点で我々はイエスと異なっており、我々は「インマヌエルの原事実」を「父なる神」の「聖霊」によるイエスの宣教を通して、「インマヌエルの原事実」に覚醒して、「神の子となる」のである。我々である「神の子」とイエスである「唯一の神の子」との相違は、「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」(マタイ五48)と言われている「完全性」におけるそれである、決して本質的な相違ではない。少なくとも福音書のイエスは、「子の神・キリスト」・「神の義」を完全に映し出されている、その言葉と行動において「父なる神・キリスト」においてある「父なる神」の働きを完全に表現された、と言われる。歴史のイエスが実際にそうであったかは、実証することができないので、各人の信仰によることである。また、シュヴァイツァーが、「わたしの父」と「わたしたちの父」との区別の根拠として上げている「主の祈り」——ここではイエスは含まれず、弟子たちに限定されているとシュヴァイツァーは解している——は、イエスがゲッセマネで祈られた祈り(マタイ26 36-46)と本質的に同じではないのか。そうだとすると「主の祈り」はイエス自身の祈りを弟子たちに教えたということで、「わたしたちの父」の「わたしたち」の中に人イエスも含まれていると解してよいのではないか。従って、そのことに関連して、シュヴァイツァーは「イエスは神を第一には自分の父として呼びかけた。彼が自分に従って神を自分たちの父と呼びかけるようにと弟子たちを教えたということは、奇跡であり、賜物である」<sup>50)</sup>と言うのであるが、そもそも「インマヌエルの原事実」は奇跡の中の奇跡であり、この原事実が我々誰にでも

無償で、無条件に、端的に、不可逆的に与えられているのであり、これこそ最大の「賜物」ではないのか。イエスを含めて人は誰れでも「インマヌエルの原事実」に限界づけられ、支えられ、生かされたものとして、実在するということをシュヴァイツァーには、見えていないのである。さらに繰り返しになるが、「唯一の神の子」(イエス)と「神の子たち」(イエスの弟子たち)との区別について言えば、「インマヌエルの原事実」における「父なる神」と人(イエスも含めて)との結接点(子の神・キリスト)こそ、文字通り「唯一の神の子」(三位一体の神のうちの子の神・キリスト)であり、イエスを含めて我々人間が「神の子」と言われるのは、「子の神・キリスト」に於て、「父なる神」とイエスを含めての人間とが直接に一つであるからであり、この限りにおいてイエスの弟子を含めた我々人間と人イエスとは、等しく「神の子」と言うことができる。等しくインマヌエルの神の「神の子」でありながら、イエスとイエスの弟子たちとの区別ということでは、イエスは「子の神・キリスト」における「父なる神」の働きを完全に映し出されているけれども、イエスの弟子たちは「あなたがたも完全なものとなりなさい」と言われている状況にあるにすぎないという、映し・表現における「完全性」の程度における区別である。シュヴァイツァーが主張する「唯一の神の子」(イエス)とその弟子たち(神の子)との区別は、「子の神・キリスト」に於て働いている「神の義」をどれだけ完全に映し出しているかという点での相違にすぎないのであって、「イエスが子であることが人間の場合とはちがうという点」<sup>57)</sup>とシュヴァイツァーが映しの完全性を超えて本質的な相違を主張するのは、彼のキリスト論が問題なのであり、イエスを「人間」以上のものと絶対化しているのであり、三位一体の神の「子の神・キリスト」にイエスを人間の絶対的限界を無視してまつりあげようとするのである。そのイエスは、「なぜわたしを「善い」と言うのか、神おひとりのほかに、善い者はだれもいない。」(マルコ一〇八)と言われておられる、また、マタイ一六章のいわゆる「ペトロの信仰告白」のところで、イエスは、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えたペテロに向って「あなたは幸いだ。あなたにこのことを現わしたのは人間[イエス]ではなく、わたしの天の父なのだ。」<sup>58)</sup>(マタイ一六16-17)とイエス自身言っておられる、そして決定的にはイエスは十字架上で死んでいるのである、イエスは誰よりも人間の絶対的限界(「インマヌエルの原事実」)を厳守されたのである。その同じ所で百人隊長が「本当に、この人は神の子だった。」(シュヴァイツァーは唯一の神の子のことを語っていると解している)といっているのも、ただ奇跡を見たからそういっているにすぎない(マタイ四1-11参照)。イエスが湖の上を歩いているのを見て、弟子たちが「本当に、あなたは神の子です。」と言った(マタイ一四22-33)ということも同断である。最後に、シュ

ヴァイツァーが「マタイ五章9節でも明白に神との交わりの奇跡が考えられているのであって、平和をつくる人に最後の審判において、彼を変化させる神の力にみちた宣言によって（「呼ばれる」）、賜物として与えられるはずである。」<sup>59)</sup> と言っていることも、彼が「インマヌエルの原事実」（「天の国は近づいた」）というイエスの宣教の核心を見ていないことからの説明にすぎない。端的に、無条件に、不可逆的に、「インマヌエルの原事実」（「神との交わり」の奇跡）が、我々の人生・世界のそもそものはじめに、第一義的に与えられているのである（賜物）。この「インマヌエルの原事実」（「幸いなるかな」）における「子の神・キリスト」のところに、神の創造・保存が、従って時の終りと時の始めとが、実在するのである。その「子の神・キリスト」において「父なる神」の「神の義」に基づく審き・決定が実際おこなわれているのである。

さらに8節の「浄い心の人たちは幸福だ。彼らは神を見るからである。」についてのシュヴァイツァーの解釈即ち「浄い心」とは「無邪気な」神に向けられた心である。それは彼において信仰と称される、まさにそのものである。……今人間にとっては不可能である神を見ることは、終りの時に成就する約束である。」<sup>60)</sup> を問題とする。その解釈は、「インマヌエルの原事実」から離れて抽象的に、一般的に、空想的に考えられたものにすぎない。「浄い心」とはイエスの如く「インマヌエルの原事実」に信頼（信仰）して生きる人の在り方・生き方のことを言っているのである。「無邪気な神に向けられた心」とはもっと厳密に即事的に「インマヌエルの原事実」の神に向けられた、ただ端的に「インマヌエルの原事実」を信頼する心のことであり、従ってそれは「インマヌエルの原事実」によって清められた信仰そのものと言えるのである。従ってシュヴァイツァーが「神に向けられた心」とか、「心は、感情の座であるだけでなく、それはもっともかくれたものであって、そこから生全体が、しばしば無意識の中に形成される。」と言っているのも正確ではない。心とは「インマヌエルの原事実」（隠れたところにおられるあなたの父）において「まず土の塵で人の形」が創られて、それに神の「命の息（聖霊）が吹き込まれて」「心」が引き起こされる（同時に人の形は「身体」となる）、そして心はその「インマヌエル」の神から絶えず「あなたは、どこにいるのか」と問われている」のであり、それに対して心は何らかの答（「かくれたこと」）をなしているのである。（創世二七、三九。サルトルのいわゆる「根源的選択」を心はなしているのである。）「神を見ることは、終りの時に成就する約束である」ということも「インマヌエルの原事実」という生きて働いている原事実における「子の神・キリスト」において、そこで直接に一つである「父なる神」を、その働き（聖霊）によって知るのである、つまりそのような意味で自己の根底に生きて働いておられる「神を見る」のである。

そして、7節の「憐れみのある人たちは幸福だ。彼らは憐れみを見出すからである。」についてのシュヴァイツァーの解釈、「憐れみとは喜捨に際しての気前よさに限られるものではない。人間の行うあらゆる憐れみの行動は神の憐れみに起源を持つ、憐れみを自分で行わないものは、神の憐れみをあてにするわけにはいかない。」<sup>61)</sup> という解釈を問題にする。ここでも「神の憐れみ」ということが言われているが、それがどこにあるかもわからずに漠然と言われているだけで、「インマヌエルの原事実」に於てある「神の憐れみ」ではない。ここで憐れみのある人たちとは、イエスの如く、「インマヌエルの原事実」に信頼して生きる人の在り方・生き方のことを言っているのであって、十把ひとからげに「人間の行うあらゆる憐れみ」のことではありえない。イエスの如く「インマヌエルの原事実」に信頼して生きる人にとっては、どんな人のところにも「インマヌエルの原事実」が来ておられる、「インマヌエルの原事実」に於てある人は「父なる神」によって憐れまれて存在している、ということを知っている。従ってイエスの「善いサマリア人の譬」（ルカ一〇25-37）においてのように、「追いはぎに襲われて傷ついた人」の所にも「インマヌエルの原事実」は実在するので、その人を憐れに思ったサマリア人が介抱したという生き方・在り方に表われている「憐れみ」を、或はイエスの「すべての民族を裁く」（マタイ二五31-46）という譬における「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」というように「インマヌエルの原事実」においてある「小さい者」に対する憐れみの行為に表われているのである。

次に6節「義に飢え、渇いている人たちは幸福だ。彼らは満腹になるからである。」についてのシュヴァイツァーの解釈を問題とする。「飢えることおよび渇くことは、すでに旧約聖書において、神の言葉、恵み、臨在の切望のたとえとして好んで述べられている。貧しい人たち、取るに足らない人たちに対して、彼らの飢えはいやされると約束される。イエスの時代のユダヤ教では、飢えは神の与える救いにみちたこらしめと理解されていた。この言葉は救いの言葉である。」勿論「本来の成就是神の終局史的行為であるはずだ。」<sup>62)</sup> と。ここでもシュヴァイツァーは、「義に飢え渇く」という行為が、イエスの如くに「インマヌエルの原事実」にのみ信頼して生きる人の在り方・生き方のことをイエスが宣べていることを全然理解していない。従って、「神の義」がどこにあるのかもわからずに、ただ漠然と義ということを行っているだけである。「インマヌエルの原事実」において、「神の義」は実在しているのである。故に「インマヌエルの原事実」に信頼して生きる人は「義」を追求せざるをえないのであり、神の義に満腹するのである。

さらに5節についてのシュヴァイツァーの解釈、「イエスの用語法では、この語〔謙

遜な人たち]は「貧しい」という語とほとんど区別できない。つまりそれは「取るに足りない、卑しい」というひびきを持っており、おそらく「権力のない」と訳するのが最もよい。弱々しさとは、それは全く関係がない。この権力のないものたちが、いつか地の国を所有するはずなのである！」<sup>63)</sup>「謙遜な人たちがいつか相続するという地の国は、天国とちがわないからである。天国は新しい地において現実となるのである。」<sup>64)</sup>という解釈を問題とする。ここでも、シュヴァイツァーは、「謙遜な人たち」とはイエスの如く「インマヌエルの原事実」に信頼して生きる人の生き方・在り方をイエスが記述していることを見て取っていない。「謙遜な人たち」「権力のない人たち」とは、「インマヌエルの原事実」に信頼して生きる、従って一切の権威・権力を「インマヌエルの原事実」に臨在させられている「父なる神」に帰する、生き方・在り方を指し示しているのである。「インマヌエルの原事実」（神の国）において人間・この地はしっかりと限界づけられている（「地は神の足台である」）、神の支配の下に支えられ、生かされているのである。「地を嗣ぐ」とは、シュヴァイツァーの言うような「カナンの地に、神の国の所在地となる全地に」関係づけられるのでなくて、また終末論的な来たるべき「地」でもなく、「インマヌエルの原事実」に信頼して生きるということ以外のことではない。「インマヌエルの原事実」における「子の神・キリスト」において、「父なる神」による、天地の創造・保存は生起しているのであり、人が「インマヌエルの原事実」に於てあるとは「地」に於てあるということである。その限り「マタイはつまりイエス自身をこのような「謙遜」のそもそもの模範と見ているのである。」とは、「インマヌエルの原事実」を生死の唯一の拠り所としてこの地上に生きられたイエスのことであるのだ。

さらに4節「悲しんでいる人たちは幸福だ。彼らは慰められるからである。」についてのシュヴァイツァーの解釈、「ここではあらゆる悲しみが考えられている。それが肉体に由来するものか、心に由来するものかは、問題ではない。ここでも、神はもっとも必要とされるところに臨在する、ということが言われているのである。……この言葉は、イエスによって自分に、神はまさに今や、預言者たちが神の終末時に対して期待していたとおり、現実となる、と語りかけさせている人において、真実となる。」<sup>65)</sup>と云う解釈を問題とする。ここでもシュヴァイツァーは「インマヌエルの原事実」を信頼して生きる人の在り方・生き方を問題にせず、漠然と「あらゆる悲しみが考えられている」と言う。「悲しむ人々」という場合には「インマヌエルの原事実」を信じて生きる人の生き方・在り方としての「悲しむ人々」と厳密に即事的に限界づけられたものである。シュヴァイツァーの言う「神はもっとも必要とされるところに臨在する」ということは実は「インマヌエルの原事実」において人は実在するという

ことなのである。従って、「インマヌエルの原事実」に信頼して生きるイエスの感じる「悲しみ」を「悲しむ人々」ということになる。「インマヌエルの原事実」がどんな人にもすでに与えられ、積極的に神の義を映して生きれるようになっているのに、そのことに気が付かず、その原事実を源泉として成り立ってきたよきもの（宗教、国家、財産等）に生の根拠をおいて、それにふりまわされている不安と恐怖の生き方に対する「悲しみ」である。また「イエスの臨在するところにおいてのみ、悲しみが克服された、という事態がおこり得るとされている。」ということも「イエスの語り」「イエスの権能」を前提しているが、「インマヌエルの原事実」は、イエスに依らない、イエス以前の太初からの、端的に、無条件的に、不可逆的にすべての人に与えられている、「インマヌエルの原事実」であるのだ。「インマヌエルの原事実」に拠って生きる人において生ずる悲しみは、その「インマヌエルの原事実」から「慰められる」のである。そこには「慰め」に満ち満ちているのである。

終りに3節「霊において貧しい人たちは幸福だ。天国は彼らのものだからである」についてのシュヴァイツァーの解釈を問題とする。〈Heil den Armen im Geiste, denn ihrer ist das Himmelreich.〉<sup>66)</sup>と彼はせっかく翻訳しながらも、〈Heil〉ということが無条件に端的に全ての人に与えられている、「原福音」・「インマヌエルの原事実」・「天の国は近づいた」ということであることを理解することが出来なかった。つまり、シュヴァイツァーは「幸福の叫び」を「イエスが請け合い、またそれが聞かれる場合には、人は彼の招きのもとに、新たに、かつ幸福となる。それは、イエスの招きにおいてすでに神の将来的な国が彼の上に来たからである。」と言うように、どこまでも「神の子・キリスト」であるイエスとの関わりにおいて、理解していて、この「幸福の叫び」が実に、イエスに依らない、イエスもそれに拠って生きた、我々の人生・世界の大前提、我々にとって真に幸いなる根源的事実、我々にとってどんなに感謝してもしたりない恵であり、救いである「インマヌエルの原事実」であることを、それをイエスは無条件に、端的に、第一義的に「幸福の叫び」(μακάριοι 形容詞、男性、複数、主格)で指し示しておられることを理解することができなかったのだ。従って〈den Armen im Geiste〉とは、その「幸いなるかな」(インマヌエルの原事実)に於てあり、それを信頼して生きる人の在り方・生き方の限定された・分節化されたものと受けとめえなかった。それ故に、〈Heil〉が〈den Armen im Geiste〉の述語と理解された、〈sind〉が省略されている場合と理解している。すなわち「霊において貧しい人たちは幸福だ。」となった。かくてシュヴァイツァーは「霊において貧しい人たち」を「幸いなるかな」(「インマヌエルの原事実」と関係なしにそれが何を意味しているかを確定し、そしてそれを「イエスの語りかけ」「イエスの権能に

よる請け合い」でもって根拠づけようとする。即ち「霊に関して貧しい人々」とは「外的状況によって、すべてを神に期待するように追い込まれた、しかしまた本当に、すべてを神に期待すべく神から霊を与えられたそういう人々のこと」<sup>67)</sup> だと。ところで「同じように貧しい一人の人物[イエス]が、何ら貧しい人々の状態をかえることをしないで、彼らは幸福であると言う。ただそれだけの理由で貧しい人々が幸福であるということは、決して分かり易いことではない。イエスのできる唯一の根拠づけは、彼らのものである神の国を指し示すことである。」<sup>68)</sup> しかしその指し示しはどのように有効であるのか。「イエスはおそらく、万事は、イエスがここで請け合うことを神がいつか果して下さるといふ点にかかっている、ということを知っている。しかし、彼がそのことを行うとき、将来的な御国は彼らのところに来る。それゆえに彼らはすでに「幸福」なのである。もっとも、そうであるならば、すべては、イエスの背後に神自身の権能が存する、という点にかかっている。」<sup>69)</sup> 換言すれば「イエスの招きの有効性が、その人において神がこの世界の中へと押し入って来た、その彼によって語られているということにかかっている。」<sup>70)</sup> と。我々は結局のところシュヴァイツァーの根拠づけが「その人において神がこの世界の中へと押し入って来た、その彼」つまりイエスが「唯一の神の子」であるというキリスト論の伝統によっていることを確認できた。つまり「インマヌエルの原事実」における、人間の絶対的限界である「子の神・キリスト」と「唯一の神の子」(イエス)とを同一視するのであるから、いくら「神」といっても「父なる神」がどこにいますのやら、人イエスといってもそのイエスがどこにいますのやらまったく曖昧のままなのである。「インマヌエルの原事実」における「子の神・キリスト」からのみ、「父なる神」を確認でき、人間(人イエス)をその根底から厳密に即事的に認識できるのである。いったい人間・世界の絶対的限界である「子の神・キリスト」が「この世界の中に押し入って来た」とは、シュヴァイツァーがイエスを「唯一の神の子」と考えていると言ったが、或いは、「この世界の中に押し入って来た」と言われているので「聖霊」がイエスの中に働いていると言うことをシュヴァイツァーは考えているとも受け取れるが、この場合でも、その「聖霊」がどこから出てくるかが明確にならない限り、曖昧なままである。なぜなら「父なる神」の「聖霊」は「インマヌエルの原事実」における「子の神・キリスト」を通して、人・世界の中に働いてくるものであるが、その「子の神・キリスト」がシュヴァイツァーのキリスト論ではイエス＝唯一の神の子であるから、結局のところ人イエスの絶対的限界である「子の神・キリスト」が明確に即事的に問題にならないのである。「人イエス」の根底に実在する「子の神・キリスト」——ここを通して「父なる神」の「聖霊」も働くのである——を、人イエスは完全に映し出された、「子の神・

キリスト」が人イエスとして現われたと考えるべきなのである。従って、シュヴァイツァーの「霊において貧しい人々」についての解釈つまり「外的状況によって、すべてを神に期待するように追い込まれた、しかしまた本当にすべてを神に期待するべく神から霊を与えられた。そういう人々」は5章3節の意味するものではありえない。そこでの解釈は、「インマヌエルの原事実」（「幸いなるかな」・「福音の原音」・「天の国は近づいた」）を大前提とし、その原事実をイエスの如くに信頼して生きる人の在り方、生き方を「貧しい人々」というように分節化・限定化して記述したものであるということ、従ってそれは「霊に関して貧しい人」（シュヴァイツァー）でもないし、実際に「社会的に貧しい人々」でもないのである。どこまでも「インマヌエルの原事実」を信頼して生きる人の在り方・生き方としての「貧しい人々」である。人イエスの在り方・生き方がその模範である。そして、シュヴァイツァーは「すべてを神に期待するべく神から霊を与えられた、そういう人々」と言うのであるが、「父なる神」の「聖霊」は、「インマヌエルの原事実」における「子の神・キリスト」を通して働くのであって、漠然と神から与えられるのではなく、人間の根底に実在する「子の神・キリスト」を介しているのである。

最後に「天国は彼らのものである」という終末論的約束について、シュヴァイツァーは、「イエスのできる唯一の根拠づけは、彼らのものである神の国を指し示すことである。イエスが御国について語る場合は、それはいつも若干将来的でもあるのである。彼はおそらく、万事は、イエスがここで請け合うこと[貧しい人々は幸いだ]を神がいつか果たして下さるといふ点にかかっている、ということを知っている。しかし、彼[神の子・キリスト]がそのことを行うとき、将来的な御国は彼らのところに来る。それゆえに彼らはすでに「幸福」なのである。もっとも、そうであるならば、すべてはイエス[神の子・キリスト]の背後に神自身の権能が存在する、という点にかかっている。」<sup>71)</sup>と云うのであるが、シュヴァイツァーは、イエスがここで「貧しい人々は幸いだ」といっているのは、「インマヌエルの原事実」においてある人の生き方、在り方を指し示していることを見ていないのでこのように曖昧にしか解釈できないのである。その為にはここでシュヴァイツァーが区別しているように「父なる神」と「神の子・キリストであるイエス」とを区別するだけでなく、独断的キリスト論にとらわれることなくさらに「神の子・キリストであるイエス」に於て、「人イエス」と「子なる神・キリスト」とを厳密に・不可逆的に区別する必要がある。端的に無条件に、「幸いなるかな」(μακάριοι)——全ての幸いなる言葉の冒頭に置かれている、人間・世界の大前提である、驚くべき、奇跡的な「インマヌエルの原事実」——ということが、どのようなものかが明確になる。つまり「インマヌエルの原事実」は、人イエス



によらない、イエス以前の天地創造の時にすでに成就している原事実であり、人イエスはどこまでもこの「インマヌエルの原事実」に信頼して生きられた、誰よりも明確に完全にこの「インマヌエルの原事実」が全の人に無条件に贈られている、恵まれているということをその言葉と行動において示された。「悔い改めよ、天国は近づいた」・「神の国の福音」・「幸いなるかな (μακάριοι)」と明確に・端的に表現された。「天国は近づいた」ということは現在完了形でいわれているが——「インマヌエルの原事実」を厳密に表現すれば、「天地創造の時」以来のことであるからそう言うほかはないのであるが、この「インマヌエルの原事実」（「父なる神」と「人イエス」が「子の神・キリスト」において直接に一つである）はどこまでも「父なる神」による、全く自由な、一方的な、不可逆的な関係設定であるから、「インマヌエルの原事実」においてある我々（イエスも含めて）からすれば、人間の側からすれば、決してそこに行けない。どこまでも無限の時間・空間が介在するのであるが、それを超えて「父なる神」から贈られていること、恵まれていることであるから、現在の時の根底に実在する「インマヌエルの原事実」はそこに限界づけられている人間からすれば将来的・未来的なこととして表現せざるをえないのである。「イエスの背後に神自身の権能が存在する」ということは「インマヌエルの原事実」における「子なる神・キリスト」のところに「父なる神」が臨在しておられるということであり、「人イエス」は「子なる神・キリスト」のところに自己限定されている「父なる神」の働き・「聖霊」・「御心」を完全に、ありありと映し出された、「人イエス」の言葉と行動において「父なる神」が働いておられるということである。「イエス〔神の子・キリスト〕の背後に神自身の権能が存在する」とは、即事的に・厳密には何を言っているのであろうか。「人イエス」のことも、「子の神・キリスト」のことも、「父なる神」のことも、何も言っていないのである。シュヴァイツァーが独断的・伝統的キリスト論にとらわれているので、すべてが曖昧になっているのである。

[二〇一四・六・四]

## 註

- 1) Eduard Schweizer, Das Evangelium nach Matthäus, übersetzt und erklärt, NTD Band 2, 1973. E・シュヴァイツァー『マタイによる福音書——翻訳と註解——』佐竹明訳 NTD新約聖書註解刊行会 1978
- 2) 『マタイによる福音書』佐竹訳 p.92
- 3) ibid. p.105
- 4) ibid. p.96
- 5) ibid. p.97

- 6) ibid. p.97
- 7) ibid. pp.98-99
- 8) ibid. p.98
- 9) ibid. pp.99-100
- 10) ibid. p.102
- 11) ibid. p.100
- 12) ibid. p.100
- 13) ibid. p.101
- 14) ibid. pp.100-101
- 15) ibid. p.104 「この招きの持つ完全に逆説的な性格」といわれているものは「インマヌエルの原事実」に基づくものであり、単に「神の意志」・「神の王権」に基づくものではない。もっとも「インマヌエルの原事実」は「父なる神」による一方的で、不可逆的な人との関係設定の事実であるが、どこまでも「神の意志」・「神の王権」は「インマヌエルの原事実」における「子の神・キリスト」のところに自己限定して来ておられる「父なる神」であり、その神の意志・その神の王権であるからである。
- 16) ibid. p.103
- 17) ibid. p.104
- 18) ibid. p.105
- 19) ibid. p.105
- 20) ibid. p.106
- 21) ibid. pp.106-107
- 22) ibid. p.107
- 23) ibid. p.108
- 24) ibid. pp.108-109
- 25) ibid. p.110
- 26) ibid. p.111
- 27) ibid. p.111
- 28) ibid. p.112
- 29) ibid. pp.112-113
- 30) ibid. p.113
- 31) ibid. pp.114-116
- 32) ibid. p.116
- 33) ibid. p.116
- 34) ibid. pp.116-117
- 35) ibid. p.118
- 36) ibid. p.118
- 37) ibid. p.95
- 38) ibid. p.105
- 39) ibid. p.96
- 40) ibid. p.105
- 41) ibid. pp.118-120
- 42) ibid. p.104

- 43) ibid. p.105
- 44) ibid. p.105
- 45) ibid. p.119
- 46) ibid. p.119
- 47) ibid. p.119
- 48) ibid. p.119
- 49) ibid. p.119
- 50) ibid. p.116
- 51) 新共同訳に拠る。次の引用も同じ。
- 52) ibid. p.116
- 53) ibid. p.117
- 54) ibid. p.114
- 55) ibid. pp.114-116
- 56) ibid. p.114
- 57) ibid. p.115
- 58) 新共同訳に拠る。
- 59) ibid. pp.115-116
- 60) ibid. p.112
- 61) ibid. p.111
- 62) ibid. pp.109-110
- 63) ibid. p.108
- 64) ibid. p.99
- 65) ibid. pp.106-107
- 66) E. Schweizer, *Das Evangelium nach Matthäus*, NTD, Band 2, Vandenhoeck & Ruprecht. p.45  
なお「幸福の叫び」についての引用は、註4）参照のこと。
- 67) ibid. p.103
- 68) ibid. p.104 「イエスのできる唯一の根拠づけは、彼らのものである神の国を指し示すことである。」とシュヴァイツァーが言う場合、彼は「天の国はその人たちのものである。」という終末論的な約束を理解しているのであるが、イエスの福音は「天の国は近づいた」ということ、「インマヌエルの原事実」であるから、イエスは終末論的な約束である「天の国」を指し示されたのではなく、根源的に現在的な「インマヌエルの原事実」を指し示されたのである。なぜならば「天の国は近づいた」という「天の国」は、「わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時から、お前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。」（マタイ二五34）とも言い表わされているからである。人イエス（神の子・キリスト）以前の「天地創造の時から用意されている国」つまり「神の国」即ち「インマヌエルの原事実」を人イエス―イエスもそれによって支えられ生かされているそれ―は指し示されているのである。従って「ただそれだけの理由で貧しい人々が幸福であるということは、決して分かり易いことではない。」ということの積極的な理由は、「インマヌエルの原事実」が無条件にすべての人に恵まれているという、父なる神による不可逆的な人との関係設定であるという、理由なしの根源的な救いであるということにあるのだ。
- 69) ibid. p.104
- 70) ibid. p.105
- 71) ibid. p.104

[以上]